

降誕後・第一主日(歳晚礼拝)

「わたしは新しい事をする」

イザヤ43章14-21

ルビ2:10-16

(1)

先ほどイザヤ書43章14以下を共に拝読しました。特に18と19節に注目してください。「先の事どもを思い出すな。昔の事どもを考えるな。見よ。わたしは新しい事をする。」

今、もうそれが起ころうとしている。あなたがたは、それを知らないのかとあります。

これは神の民・イスラエルの現状を指摘した御言であります。

人はしばしば、それまでの失敗や挫折にこだわります。さらにいえば、自らの成功や栄光も含めて、なかなかそれから自由になれません。先のこと、昔の事を考えることが一概に悪いとはかりはいえません。しかし、過去にこだわり続けている限り、トンネルから抜け出すことは出来ませぬ。

考えてもみてください。何事においても、失敗もしないで成功した人は世に一人もいません。多くは、三歩前進、二歩後退の繰り返しです。キューリー夫人は、何と400回も試行錯誤して、ついにラジウムの発見をしました。

エジソンは、電球のタンクステンにふさわしい素材を見つけるまで、多くの失敗をしました。「失敗は成功の母」なのです。挫折や失敗したからといって入ってこれたわけではないので

す。

「星野富弘」さんは、体育の教師でしたが、宙返りの実技に失敗して、下半身不随となりました。ところが、入院先の群馬県前橋市の病院で、後に奥さんとなられたクリスチャンの看護師さんと出会います。彼女から差し出された聖書を読み、イエス・キリストを信じ、洗礼を受けます。その後、彼が道端で観たさまざまな草花の水彩画と短い詩を添えた画集が出版されます。やがて、それがベストセラーとなり、テレビで紹介され、郷里に記念の美術館が出来るまでになりました。

「正しい者は、七たび倒れても、また起きあがる」(箴言24:16)、これは箴言の御言です。「七転八起」は、もしかすると、箴言が出所元かも知れません。それはともかく、如何なる時も、神に信頼を寄せて生きる人は、たとえ、七たび倒れたとしても、倒れたままにはならない、いえ、立ち上がる力を与えられると言われている。

今朝の礼拝、2020年最後の「歳晚礼拝」です。イザヤ書43章18節と19節から、新たな年を迎える心備えをしておきたいと思えます。

もう一度、読みます。「先の事どもを思い出すな。昔の事どもを考えるな。見よ。わたしは新しい事をする。今、もうそれが起ころうとしている。あなたがたは、それを知らないのか。確かに、わたしは荒野に道を、荒地に川を設ける。」

「先の事どもを覚えてなむらひ」「昔の事も覚えてはならぬ」が繰り返されていきます。主イエスも、同じようなことをおっしゃいました。「だれでも手を勤(き)む(む)らひつけてから、うしろを見る者は、神の国にひかわくくない」「ルカ9:62」。「うしろを振り向いた」ことで、厳しく戒められたのは「ロトの妻」です。ところが彼女は後ろを振り向いたため、「塩の柱」となりました。何故、「ロトの妻」が、後ろを振り返ったかについては、今は申しません。

かなり以前のことです。書斎にいた時、隣の家のラジオから、「あなたの過去など、知りたくないの。済んでしまったことは仕方ないじゃないの」という、あの有名なジャンソンの歌声が流れてきました。それを耳にしながら、ハタッと気づいたのは、多くの人は、自分の過去など知られたくないのだ、とすれば、人の過去にむやみに触れてはならないと気づかされたのです。

その時から、人の過去をあれこれと問わないように注意しました。それまでは、平気で尋ねていたのです。そのことが、相手にどれほど気まずい思いをあたえていたかに気づきませんでした。むしろ、アフリカと尋ねるものが親切におもったのです。沖縄では、名刺の交換をする習慣がありません。

その時から、ひととひと、その人の「現在」と「これから」の心を向けるようになりました。

するところでしょう。会話がスムーズに運ぶではありませんか。その頃からです、会話そのものが楽しくなりました。不思議なおきましました。そのころから洗礼を受けたいと申し出る方が多く起こされました。うしろ、それまで気づかなかったのかと言われるかもしれませんが、気づくとは、いつもそつた鈍い面があります。

「先の事ども」「昔の事ども」にこだわりの続けている限り、多くの人は、人生という「苦い水」を飲み続けているといえないでしょう。か。

神の民イスラエルが、エジプトから出て、荒野を旅していたときの記事があります。

「彼らはマラに來たが、マラの水は苦くて飲めなかった。それで、そこはマラ(苦い)と呼ばれた。民はモーセにつばやいて、『私たちは何を飲んだらよいのですか』と言った。モーセは主に叫んだ。すると、主は彼に一本の木を示されたので、モーセはそれを水に投げ入れた。すると、水は甘くなった」(出15:23-25)。

「苦くて飲めない水」「一本の木」を投げ入れると、水が甘くなったというので、それ以上の仔細な事情は分かりませんが、仮にですが、人生のもろもろの苦くて飲めない水があるとして、それを甘くしたのだとすれば、「一本の木」があるとするれば、それは、イエス・キリストの十字架ではなむらひでしょうか。

「イエスの血、すへての罪よりの我りを潔く

「わい(わたし)は、神の御言が  
 あります。神の御言が、  
 日々、何度、悔いても、悔いても、なお、同  
 じ罪を犯し続けてきた、わたしの、あなたの、  
 罪があります。その罪をイエスの血が潔めて  
 下さる、しかも、「す」であるではあるま  
 せんか、なんと感謝なことでしょうか。多  
 くがこの御言により新たに生きるとを与えら  
 れてきました。

ハイデルベルグ信仰問答の問60は注目すべ  
 き箇所です。少々長いですが読みます。  
 「このようにして、あなたは神の前に義とな  
 るのですか」。

「ただ、イエス・キリストを信じることの  
 信仰によるだけではありません。かへして、わた  
 しの良心が、神のあらゆるいさめに対して、い  
 基だしく罪を犯し、そのいさめのどの一つ  
 をも守ることができず、いつまでも、あらゆる  
 悪に向かう傾向があるところ、わたしを責  
 めたてたところ、す」。

また、神はわたしに何の功績がなしてこ  
 ただ、恵みによって、あたかもわたしが、何  
 の罪を犯したこともなく、持ったこともなく、  
 キリストが自ら、わたしたちのために果たし  
 てくださった、すべての完全な服従を、まる  
 でわたし自身が完全に行ったものであるかの  
 ち、このわたしの恵みを信じる心をもち、  
 愛がよみえられ、わたしに完全な償いと義と  
 聖性をわたして下さるものと与えて下さるものと  
 あります。

「ごまじめのことを守ることができな  
 く、神の御言がなして下さる、  
 への完全な服従を、まるでわたし自身が完  
 全に行ったものであるかのように、わたしに  
 完全な償いと義と聖性をわたして下さるものと  
 与え下さるものとあります。これ以上に完璧な、  
 完全な、恵みと赦しの理解に達するでしょ  
 うか。たとえ、百回聖書を読んでも無理です。伝  
 道者・賀川豊彦は、聖書を読んでも分からな  
 いという青年に百回読んでから、そうした文  
 句を言いなさいといっていたそうです。ほとんど  
 は、せいせい二合目が三合目に達する程度で  
 す。わたしたちとしては、ハイデルベルグ信  
 仰問答60の告白を、ただ、ただ、ありが  
 たく告白するしかありません。仮に、今年一  
 年、どれほどの苦い水を飲んで来たとしても、  
 キリストの十字架という「一本の木」が、あ  
 なたの人生に投げ入れれば、それを甘い水に  
 して下さるのです。

(2)

わたしの赴任した最初の教会は、創立後ま  
 もない教会でした。それでも、創立以来の信  
 徒たちが数多くいました。彼らはなにかといえ  
 ば、以前はこうだった、ああだったと、宣教  
 師時代の例を引き合いに出してきました。そ  
 れは、まるで古びた骨董屋の引き出しではな  
 いが、と思われました。「昔」とか「以前」を  
 引き合いに出す者に限って、往々にしてチャ  
 ント精神が見られます。

「キリストの教会は、神の御言と聖書の御言を  
 信じ、

て絶えず改革されなくてはならぬ」と、「これは、宗教改革以来の命題であります。」絶えずとは、改革されなくてはよい教会は、地上に一つもないところになります。地上の教会は、絶えず、御言と聖書とによって改革を継続しなければなりません。

(3)

1700年、イザヤ書43章18節から19節の御言は、バビロニア帝国に拉致された神の民・イスラエルが、自分たちの将来に不安を覚え、深く沈み込んでいた時に語られた御言であります。囚われの身となって、既に50年が経過していました。イスラエルからバビロンに拉致された民は5万5千、しかし、50年が経過して、今やバビロン定住していた者の数は、約20万と推定されています。捕囚になった根本の原因は、祖父たちの犯した罪責の故です。割の合わない負債を引き継いでいる自分たちに、主なる神は助けの手も差し伸べてくれない。」神はわれらの救いの言、救いの誓である」と信じてきた者まで、今や、生きる氣力を失い、自己憐憫におちいり、腰の重くなった老人の如く、腰を撃げただけの覇氣も氣力も失せていました。70年前のナブス時代、アウシユレツの収容所に囚われたフランクルが、夜と霧「の中」で次のような一節を記しています。

「救」の者たちは、未来を失うと同時に、その抛の所を失い、精神的に崩れはじめると、身体的にも心理的にも転落し始めました」

「それに反して、極めて、弱弱しく、繊細な心の持ち主たちが、しばしば、頑丈な身体の人々よりも、はるかに過酷な収容所生活によく耐えることが出来たとパウロドックス(逆説)があげましたと証言しています。人が生きるとは何に由るか」という根本の消息を証しています。

捕囚の民となつて50年が経過しても依然として捕囚のままである。

バビロンに囚われていた者たちの多くは、先のことを、いじえのことを振りかえるばかりです。それで、イザヤ40章をみますと、「年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者も疲れ果てて倒れる」(イザヤ40:2-7)以下の現状が指摘されています。こうまで弱り果てている彼らに、それでも、預言者イザヤは「主を待ち望め」と申しました。

「未来を失うと共に、その抛り所を失い、内面的に崩壊しはじめ、身体的にも心理的にも転落し始める」とは、フランクルが証言していることです。未来を失うのは、年寄りだけではありません、若者も同じです。

日本人の多くは、歴史とは過去から現在を見直すことと思いがちです。例えば、「フ」でツナント「フ」ツネ誌では、ごまかに信・秀吉・家康という武将たちの生い立ち、戦術を今目的に適應するべく努めています。

ところが、如何なる事態のなかでも、主を待ち望め「イザヤはこう言います。今や一掃ではなから、二掃もあらず、三掃もあらず、よひの

は、とんでん返しのエピソードもあるではないかという点なのではないか。

以前にも増してきいを感じるわたしですが、「老けてはいけない。周りの者は右のような心であっても、くくじけたらあかん。大いなることを主に期待してなさい」と励まされていきます。

「あなたがたは、知らないのか、わたしは荒野に道を、荒地に川を設ける、野の獣、ジャッカルや、だちょうも、わたしをあがめるようになる。」

わたしが荒野に水をわき出させ、荒地に川を流し、わたしの民、わたしの選んだ者に飲ませるからだ」(イザヤ40)と主なる神は言われます。

たとえ、今年一年が失意と挫折の連続であろうと、罪を犯し、汚れに満ちた歩みであったとしても、このことこだわり続けて越年してはならないのです。

フットと息を、胸一杯に奥まで吸い込み、新しい年を迎えたいものです。教会はキリストの花嫁です。新郎はキリストです。インマヌエルである新郎と腕を組んで、目の前に敷き広げられた純白のパーシモン・ロードの上を肅々と勇み歩き始めなくてはなりません。

使徒パウロはこう申しました。

「わたしがすでにこれを待たなく、すでに完全な者にならないうちか言わぬはなはな捕えぬとて追々求めてくるのである。」

それは、キリスト・イエスによって捕

えられているからである。兄弟たちよ。わたしはすでに捕えたとはいえない。ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目指して走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである。だから、わたしたちの中で全き人たちは、そのように考えるべきである。しかし、あなたがたが違った考えを持っているなら、神はそのことも示して下さるであろう。ただ、わたしたちは、達し得たところに従って進むべきである」(コロ1:12-15)。

「先の事ども」「昔の事ども」を吹き払いつつ、心新たに、新しい年を迎えたいと思えます。「不平」と「つぶやき」とで新しい年を迎えてはなりません。そうしたものは、旧年中で打ち止めておかなばなりません。

【祈ります】

天のお父さま、いろいろありましたか、あわれみの主に、今日まで守られ、来たりしことを感謝します。新しく迎える年を期待と希望をいただき迎えることができますように。キリスト・イエスの名により祈ります。「アーメン」。